

図書館だより



No. 10

平成30年2月22日

今年の冬は、“平成で1番の寒さ”、“最強寒波”など、寒さが強調された天気予報を何度も耳にしましたが、本当にいつもの冬にも増して寒さが身に沁みましたね。これから3月になると、だんだんと春の気配を感じ始められるでしょうか。冬の澄んだ空気や雪が生み出す銀世界も好きですが、春の優しい暖かさ、少しずつ景色に色が増えていく様子を眺めるのもいいものです。

さて、本日2月22日は「ニャン(2)ニャン(2)ニャン(2)」という猫の鳴き声の語呂合わせで、猫の日です。1987(昭和62)年に猫の日制定委員会が制定した記念日です。愛猫家の人には気分の上がる日ですね。ちなみに、この猫の日は世界各国に存在し、イタリアは2月17日、ロシアは3月1日、アメリカは10月29日、世界共通の「国際猫の日」は8月8日に制定されています。

この猫の日にちなんで、丸善 丸の内本店では、本日から28日(木)までCatアートフェスタが開催されます。「猫」をテーマに、人形・陶芸・絵画など、様々なジャンルの猫作品に出会えるチャンスです！



*ディズニーリゾートの中で楽しむ季節の草花

689-デ 『東京ディズニーリゾート 植物ガイド』 畑山 信也 || 企画・文 講談社

ディズニーの魅力は様々なところにありますが、実は“植物”もそのひとつです。ディズニーランドには約200カ所の花壇があり、そこには年間220種以上の花が植えられ、1年中花が咲き誇っています。またディズニーシーでも約6000本の樹木と、100万株の草花が植えられているのだそう。こうして植物に注目してみると、本当にたくさんの植物がパーク内を雰囲気によって華やかに、賑やかに、彩っていることに気がつき、「次に訪れた時は何が咲いているか見てみよう」と楽しみな気持ちになります。ディズニーランドローズやミッキーマウスツリーなどの存在も気になる場所。

*相棒(猫・オス・名前はピート)がいたから、頑張れる

933-ハ 『夏への扉』 ロバート・A・ハインライン || 著 早川書房

「だが夏への扉の探索をやつはあきらめようとはしなかった」

友人に裏切られ、婚約者に捨てられ、仕事も失い、僕はコールドスリープで30年後の世界へとばされた。すべてを奪われ、殺される代わりに眠らされてしまったのだ。なんてことだ、取り残されたピートはきっと僕に見捨てられたと思いつつながらのたれ死んだらう。僕は大切なものを取りもどすために奮闘する。

ピートは冬に雪が積もっていると、僕に家中の扉を次々開けさせたものだった。人間用の十一の扉の少なくとも一つは、夏の世界に通じていると信じて疑わなかったからだ。そんなピートの存在が、離れてしまっても力を与えてくれる。現状を変えることはできるのか！あなたもきっと、相棒ピートに会いたくなる。

贈る言葉に代えて

今年もまた卒業のシーズンを迎え、これが3年生のみなさんに手渡す最後の図書館だよりとなりました。大学の図書館や街の図書館など、これからもみなさんの身近には図書館があり、本が存在し続けます。求めた時に、本はいつでもその人の心に寄り添ってくれます。そして、本の世界で満たされた後には、外側の世界と繋がる架け橋ができています。たくさんの本と出会い、たくさんの架け橋を繋いで、人生を豊かに広げていってください。卒業おめでとうございます。

141-ケ 『内向型人間のすごい力』 スーザン・ケイン || 著 古草 秀子 || 訳 講談社

人間は内向型人間と外向型人間の2つの型に分けられます。簡単に言えば人付き合いが苦手な人と社交的な人である。私もどちらかという内向型人間の部類である。人前に立つ教師という職業を選んだが、ずっとモヤモヤした気持ちを持ち続けていた。この本を読んで、弱みと考えるのではなく自分の特性と考える、気持ちの切り替え方に強く勇気をもらった。特に私が数学を職業にして、ここまでやってこれたのは内向型人間の特徴の一つ「興味ある事には深く集中ができる」によるところが大きい。「引っ込み思案」と思う人、この本で勇気を貰いましょう。

【3 学年主任 今井勸先生からの贈る本】

913.6-ヤ 『ルビンの壺が割れた』 宿野 かほる || 著 新潮社

最後の最後まで展開がわからない。最後に差し掛かるにつれ自然と心拍が上がるのがわかった。最後の1文、「うわっ」と声を漏らす自分。フェイスブックでのやり取りで進んでいく展開はSNSの便利さと怖さの両方を感じ取ることができる。読んでいく上で生じる想像や予想が何も通用せず、今まで読んだ小説のどれにも似ていない。ネット上の賛否両論もわかる気がする。これから大学に進学する皆さんにこの本を紹介するのはもしかしたら早すぎるかもしれないが、小説とは何かを考えさせられるきっかけになると思う。1時間ほどで読める短編。読むときは覚悟をもって読むこと。

【3-1 担任 鈴木信晃先生からの贈る本】

963-イ 『アウシュビッツの図書係』 アントニオ・G・イタルベ || 著 小原 京子 || 訳 集英社

第二次世界大戦中のアウシュビッツ強制収容所では、ユダヤ人というだけで多くの命が失われました。何もかもが禁止され、絶望と飢えとが広がるその中に、小さな秘密の図書館が存在し、わずか8冊の蔵書を守るひとりの少女がいました。彼女の名前はディタ。この本の主人公であり、アウシュビッツに実在した図書係です。見つければ命も危ない図書係という任務に勇気を持って就き、本と人とを繋げたディタ。彼女は決して希望を捨てず、本の力を信じ、生きるか死ぬかの極限の状況下で、“人間らしさ”を感じられる豊かな世界を人々に運び続けました。なぜ人は本を読むのか、その答えをディタが教えてくれたような気がします。

【今井司書からの贈る本】

日本の誇れる文豪たち～おさえておきたい重鎮作家編～

日本の誇れる文豪たち～おさえておきたい重鎮作家編～、今月は夏目漱石です。漱石は東大英文科で学び、大学院まで進んだ後、英語教師を務めていましたが、文部省の留学生としてロンドンに留学します。この地で本格的な文学論の研究を始めますが、研究への葛藤、孤独感などが彼の心を蝕み、親交の深かった正岡子規の死を知った年、帰国します。帰国後、猫の視点で描かれた小説『吾輩は猫である』を発表し、これが大評判となります。漱石の作家生活はおよそ11年と短いものですが、“親譲りの無鉄砲で子どもの時から損ばかりしている”主人公が悪戦苦闘しながら教員生活を送る様子を描いた『坊っちゃん』、愛する人を手に入れるため友人Kを裏切った先生の苦悩を描いた『こころ』、漱石三部作と呼ばれる『三四郎』、『それから』、『門』など多くの名作を生み出しました。



*十人十色の『吾輩は猫である』

022-ガ『装丁道場 28人がデザインする『吾輩は猫である』』 グラフィック社

『吾輩は猫である』の「吾輩は猫である。名前はまだ無い」という書き出しは一度で覚えてしまうインパクトの強さがあり、知っている人もきっと多いはず。でも、その続きもきちんと読んだことのある人は実は少ないのかもしれない…。では、どんな表紙だったら「読みたい」気持ちが湧くだろう。そのブックデザインをお願いしたら、どんなデザインをしていただけますか？というおもしろい企画に応えてくれた、28人のデザイナーさんの作品が収録されています。

表紙のデザインだけでなく、紙の材質、行間、しおり、帯など、本を構成するあらゆる部分にこだわりが行き届いていて、どのデザイナーさんの『吾輩は猫である』からも魅力が溢れ出ています。これだけたくさん素敵な『吾輩は猫である』を見てしまったら、読むしかないですね。

*短編で楽しむ夏目漱石

913-ナ『文鳥・夢十夜・永日小品』 夏目 漱石 || 著 角川書店

書名の三編の他、『京に着ける夕』、『倫敦消息(1)』、『倫敦消息(2)』、『自転車日記』が収録されています。「こんな夢を見た」の書き出しから、10の夢の世界が繰り広げられる『夢十夜』では、百年の年月を体験したり、戦に負けた武将になったり、運慶が仁王を彫っているのに立ち会ったりと、ふわふわと彷徨う不思議な心地を読者に感じさせます。

『倫敦消息』は漱石が親友 正岡子規へ留学先のロンドンでの生活を手紙にしたため送っていたものを、受け取った正岡子規が『倫敦消息』と題をつけて、雑誌『ホトギス』に載せたものです。オートミールを「吾輩は大好きだ」と紹介したり、イギリスの女性の勢いに戸惑ったり、自分の下宿先の日本の深川に例えて説明したりする様子からは等身大の漱石を知ることができます。

*三四郎の青春、三四郎の恋

913.6-ナ『三四郎』 夏目 漱石 || 著 新潮社

大学進学のため、熊本から上京し、東京で暮らし始めた三四郎。はじめこそ、東京の何もかもに圧倒され、戸惑いを隠せなかった三四郎だったが、次第に下宿生活にも、大学生活にも慣れ、知り合いも増えていく。その中で、出会ったのが美禰子だった。三四郎は美禰子のミステリアスな雰囲気と奔放さに心を奪われるが、相手の気持ちも自分の気持ちもうまく測りきることができない。そうして、距離を縮めることができないまま、友人の一人としての関係が続いていく。時代は違っても、恋をした気持ちに変わりはなく、三四郎を悩ませるもどかしさが場面のあちこちから伝わってきます。恋の行方を予想しながら読んでいくと、「美禰子はそうくるのか！！」とラストに驚きます。美禰子が口にした「迷羊(ストレイシープ)」のひとつが、いつまでも心に残る…。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

気になるけど手を伸ばし損ねていた平野啓一郎さんの『マチネの終わりに』(913.6-ヒ 毎日新聞社)を読みました。クラシック・ギター演奏者 薪野聡史と、通信社の記者 小峰洋子、ふたりは出会ったその日に惹かれ合います。日常のふとした瞬間に何度も思い浮かべ、話がしたいと思う。相手を愛さなかった自分というのはもうどこにも存在しないと感じてしまう。そんな運命の相手に出会えたふたりは、徐々に距離を縮めていきますが、読者が「このまま上手くいくのかな」と思い始めた頃、思いがけない急展開を迎えます。度重なる不運なすれ違いで、ついふたりの関係は終わりを告げてしまうのです。このまま別々の人生を歩んでいくことになるのか、それともどこかであの日のすれ違いをやり直せるチャンスが来るのか、一体どんなクライマックスが待ち受けているのだろうとハラハラしながら、後半は一气読みをしました。こんなに切なくて、歯がゆい恋愛小説はひさしぶりに読みましたが、言葉の運びも綺麗だし、映画や音楽についてふたりが交わす会話から、それらを想像して楽しめたと、とても素敵な本でした。【今井】

今月はバレンタインのチョコレートを作るのだと、多くの生徒が図書館でレシピを探したようです。どうでしたか？思うように作れましたか？図書館におすすそ分けしてくれた人たちもいましたね。ありがとうございました。とてもおいしかったです。本を参考にして、インスタ映えるチョコレートやクッキーを作り上げた力は素晴らしかったです。また今度、何かを作る時やする時など、図書館で本を参考にして、よりバージョンアップできるようになってもらえたら嬉しいです。さて、今私が読んだ本は『美女と野獣』 ポーモン夫人 || 著 (B953-ホ KADOKAWA) です。ディズニーの実写映画を見て、なぜ魔法をかけられて野獣になったのか、映画の設定と原作との違いを確認したくなったからです。原作は、子どもの教育事業に力を尽くした作者が書いただけあって、教育的で教訓の含まれた子どもにも読みやすいものになっていました。他の違いはぜひ自分で読んで確かめてみてください。結構『美女と野獣』の基本と知っていることにも違いがあってビックリするはず。そういう読み方も楽しいものです。ディズニーの私たちに夢をさせてくれる力の強さに、改めて感心してしまいました。【鈴木】